

主体的・対話的で深い学びの実現に向けた独自道徳教材の可能性
—芥川龍之介「仙人」による、教材化の試み—

東田 充司

主体的・対話的で深い学びの実現に向けた独自道徳教材の可能性 —芥川龍之介「仙人」による、教材化の試み—

基盤教育機構教授 東田 充司

(「道徳教育論」担当)

はじめに

2015年3月27日に学校教育法施行規則の改正により、「道徳」は「特別の教科である道徳」となり、学習指導要領の一部改正の告示が公示された。中学校学習指導要領解説「特別の教科 道徳編」(文部科学省)冒頭の改訂の経緯で述べられている「今回の道徳教育の改善に関する議論の発端となったのは、いじめの問題への対応であり、生徒がこうした現実の困難な問題に主体的に対処することのできる実効性ある力を育成していく上で、道徳教育も大きな役割を果たすことが強く求められた」ことが、道徳の教科化への背景に挙げられる。また、「[「考える道徳」、「議論する道徳」へと転換を図る」という記載の中に、新学習指導要領が求める教科としての道徳の新たな方向性が視える。

筆者は、昨年度まで小学校の教育現場(追手門学院小学校)に在籍し、長年に渡って道徳授業の実践を行ってきた。特に昨年度は、本年度から始まる新学習指導要領への対応に向けた実践研究を、所属長として全校を挙げて指揮し、自らも特設授業を全学年で実践してきた。それだけ戦後初めてとなる道徳の教科化は大きな転換であり、初めての検定教科書の使用や、文書表記による評価の開始など、日々の授業のあり方そのものの検討から始める必要であったのである。道徳には、教科として対応する教員免許状は無い。全ての教員が担当する。にもかかわらず、日本私立小学校連合会に於ける全国の教科等研究組織の中には道徳の分科会が存在しないなど、他教科に比して専門に研究を進める教員が相対的に少ない現状にある。

本年度から大学に異動し、「道徳教育論」を担当するに際して、実践的な学習指導案作成を含む教材研究に裏打ちされた模擬授業の実施を、講義目標のひとつとした。教員養成を主目的としない本学に於いて求められる教職科目の役割のひとつが、教育実習に資する授業実践力の育成にある。「考える道徳」「議論する道徳」を目指すべく道徳教育論の講義手法として、課題の自己解決を前提にしたグループワークを行い、受講者全員の成果発表を毎時間求めた。学修記録(ラーニング

ログ)を毎回提出させ、コメントを含む評価を書き加えて次週に返却してフィードバックを行った。すべてが実際の授業場面を想定したものであり、教育実習での実践力育成を想定している。この中で第10回目の講義で行った、筆者による独自道徳教材と師範模擬授業の実施状況を報告する。

本稿では、「考える道徳」「議論する道徳」へと道徳授業を転換するべく、活発な話し合い活動が可能な独自教材開発の可能性を報告する。ここに大方の御批正をお願いする次第である。

1. 主体的・対話的で深い学びと独自教材について

中央教育審議会第197号答申の中で、「主体的・対話的で深い学び」の実現の達成には、学校教育における質の高い学びを実現し、学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続けられるようにする」ことが強調された。その際、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」は別々の授業場面として対応しているわけではなく、相互が一体となって実現するべきものである。道徳授業では、新学習指導要領の配慮事項にある「生徒自身が人生の課題や目標に向き合い、道徳的価値を視点に自らの人生を振り返り、これからの自己の生き方を主体的に判断する」「色々なものの見方や考え方があることに気づき、それぞれの考えの根拠や前提条件の違い、特徴などを捉え、自分の考えを多面的・多角的な視点から振り返って考える」教材が求められる。

児童・生徒の発達段階からも、従来から小学校・中学校で授業活性化の重要性は認識されている。同時に、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等に適した教材とそうでない教材があることもまた、厳然とした事実である。「考える道徳」「議論する道徳」へと道徳授業を転換するにあたり、教科化されて教科書を使う授業になる「特別の教科 道徳」の所収教材を超える補充独自教材の追及が、今回の試みの出発点である。

2. 芥川龍之介「仙人」の教材化について

今回の「仙人」(芥川龍之介)は、小学校6年対象の国語科での補充教材として、筆者が追手門学院小学校に於いて永年実践してきた補充教材である。新潮文庫版の「蜘蛛の糸・杜子春」所収の短編小説であるが、小中学生が目にする芥川龍之介の全集ものには、まず出てこない。2003年から小中学生を対象にした授業で使用しているが、受講児童・生徒の中で既読者に会ったことは一度も無い。

全文を音読しても10分程度、大きな活字でB4版プリント両面に収まる短編である。著者の没後50年を経て日本国内において著作権が消滅している点からも、教育現場の教材文として使いやすい。

大阪を舞台としていることに加えて、たった4人の登場人物による物語の推移には会話文が多用され、音読を活用することでそれぞれの心理描写の推移を巡る話し合い活動に極めて適している。特に、目的も立場も違うそれぞれが、20年に渡る時間経過を経てすべて得をしているところに、公

徳心を考えさせる十分な背景がある。国語科の範疇を超える、道徳的な側面の強い教材特性を有している。

2013年から追手門学院内での小中一貫連携教育を推進するにあたり、筆者は2017年まで国語科で音読を生かした授業実践（出前授業として実施）を行ったが、初年度の教材として「仙人」を選んだ。中学校での授業にあたっては、「心に響く授業」に重点に置いた。情報化社会を生きる中学生たちに対して「仙人になれるか」と問うた際に、どんな答えが返ってくるだろうか。芥川龍之介が多くの作品を通して訴えた「人間のエゴイズム」を、この作品を読む中で考えさせた。道徳授業で求められる公德心を扱った訳であるが、手法として文学作品の持つ価値に触れさせた。自分を振り返る機会として話し合い活動を重視し、併せて追手門学院が教育理念とする「社会有為」を考えさせる機会とした。

3. 第10回講義で実施した模擬授業の学習指導案

中学校道徳学習指導案

指導者 東田 充司

1. 日 時 2018年11月28日(水) 第4時間目および第5時間目
2. 場 所 追手門学院大学4号館4404教室
3. 学年・組 追手門学院大学 2018年度道徳教育論A・B受講学生
4. 教 材 「仙人」芥川龍之介（青空文庫より教材文作成）
5. 目 標
 - ・自らの願いを成就させる為に、努力し続けた主人公の思いを読み取ることができる。
 - ・登場人物の会話や行動から心情をとらえ、物語の主題について考えることができる。
 - ・登場人物の生き方について、自分なりの意見や感想を持ち、発表することができる。

6. 指導にあたって

(1) 生徒観

道徳教育論の模擬授業を講義内で行うにあたり、教育実習初期を想定した授業展開を行う関係上、ここでは生徒観の記載を行わない。

(2) 教材観

この「仙人」は、昔大阪の町に奉公に出てきた権助が人生の儚さを憂い、口入れ屋の番頭に不老不死の仙人になりたいと相談したところから始まる。番頭が医者に相談すると、その女房から「うちへよこせば二、三年中に仙人にする」と口から出任せを言う。翌日やってきた権助に対し、女房は「二十年間奉公すれば仙人になる術を教えてやる」と言い、以後二十年間無給で奉公させた。二十年後に仙人になる術を求めた権助に対して、女房は無理難題を押し付けてその場逃れをしようとした。しかし権助は仙人になれ、空高く昇って行ったのであった。

本作品は芥川龍之介作品の中でも年少文学と呼ばれるものの一つであるため、テーマとして道徳的要素を併せ持つ。権助が本当に仙人になることなど、誰が予測出来たであろうか。ここに大きな感動があり、この点で文学作品の主題に迫る読み取り教材として最適であると判断する。ここでは真面目に努力すれば、願いは叶うのである。

また、この物語は登場人物の会話文の比重が極めて高く、たとえ読書経験が少なくても、筋を追っていく中で比較的容易に場面の流れを捉えることが出来る特徴がある。そして、具体的事実や出来事の様子が各場面の冒頭に並んでおり、さらに心理描写が多用されている。ここに着目することにより、登場人物の心の揺れ動きが明確に把握できる。こういった叙述は、新たに出会った本学級での授業に際して、扱いやすい教材であると言えよう。

さらにこれらの特徴があるこの作品を扱う授業では、自分なりの意見をまとめる文章表現の場としても最適である。自分が感じ取った意見を綴り、発表する場としても位置付けたい。

(3) 指導観

中学生になると、発達段階から、どうしても皆の前で自分の意見を発表することに消極的になってしまう傾向が生じがちである。学習する教材が現代の生活経験から遊離した大正時代の丁稚奉公物語であれば、なおさらであろう。ただ今回の「仙人」は小・中学生が一般的に読む芥川龍之介作品の中にはまず入っておらず、既読による知識や既成概念といった条件の違いが無い為に、全員が新鮮に取り組むことが期待できる。そこで「登場人物の中で誰が一番得をしたか」という目的意識をもとに読み解き、そう自分が考えた理由を書いて発表するという手立てをとることによって文章表現意欲を促し、さらに出来るだけ多くの生徒の発表を行わせたい。

この目的達成の為に、一斉音読の後に誰が一番得をしたかを決めさせ、その同じ意見の仲間同士でグループ学習を行う。いかに自分たちの主張が正しいかをお互いに論じ合い、意見を補強し合い、お互いに高め合うかを大切にす。十分な時間を確保して話し合いをさせたい。

ここでは、どの登場人物を自分が選んだとしても誰もが得をしていることは間違いない。権助は一見損をしている様に見えるが、最後は望み通り仙人になれたのである。医者や女房はもちろん、口入れ屋の番頭は得のみである。権助を自分が選ぶということは、損得を天秤にかける必要が生じる訳で、詳細に本文に戻って確認する必要が生じるのである。単純に比較するだけではないところに、この課題設定が持つ必然性は大きい。

また権助ははじめから仙人であったという極論すら成立する。狡猾な女房に天罰を下す目的で医者之家に奉公に来て、二十年もの間給金を要求せず、炊事、洗濯、拭き掃除、果ては医者に付き添い薬箱を背負うことが出来たのも、人間ではない仙人だったからだと考えられることもまた出来る。「権助は丁寧に御辞宜をすると、静かに青空を踏みながら、だんだん高い雲の中へ昇って行ってしまいました」という一文は、ずっと仙人であり続けたからこそその描写かもしれない。この意見に対しては、最終場面に真意が分かるという芥川龍之介独特の計算された作風として確認をさせたい。

7. 指導計画

全1時間での補充教材の為、指導計画の記載を省略する。

8. 本時の目標

- 仙人になりたい願いを成就させる為に、医者の方の口車に乗せられながら二十年間無給で奉公した権助の途な思いを読み取る中で、夢を叶えることについて考える。
- 場面毎の登場人物の会話や行動から心情をとらえ、物語の主題と公德心について考える。
- 登場人物の生き方について、自分なりの意見や感想を持ち、発表する。

9. 本時の展開

| 学 習 活 動 | 指 導 上 の 留 意 点 | 準 備 物 |
|--|---|---------------|
| 1. 物語の背景を知り、本時のめあてを知る。 | • 「一番得をしたのは誰か」を本時の中心課題とすることで、読みの目的を明確化させたい。 | 教材文 ワークシート |
| 2. 音読を行い、自分の意見をまとめる。 | • 最小限の粗筋を話すことで、自分の意見がある程度予想させた上で音読に臨ませることを求め、より主体的な読みを促す。 | |
| 3. 同一人物を挙げたグループで意見を発表し合う中で、思いや主題を話し合い、全体発表を行う。 | • 今回の答えはひとつでないことを前提に発表させることにより、多面的な読み取りの理解促進を図り、作者の意図に迫ることを試みる。 | |
| 4. 本時のまとめをする。 | | |

〔ご高評欄〕

4. 模擬授業を実施して

欠席を除いた当日の受講者数は、道徳教育論Aが26名（男子14名・女子12名）道徳教育論Bは12名（全員男子）である。A組には国語・社会・英語の教員免許状取得希望者が混在しているが、B組は全員が社会の教員免許状取得希望者である。受講要件により2年次生が多数を占める。教職を目指さずに、この授業だけを履修する学生も一部に存在するが、学習意欲は極めて高い。

表1. 「仙人」模擬授業で受講生が選んだ登場人物の人数

| | 道徳教育論A | 道徳教育論B | 計 |
|-----|--------|--------|----|
| 権 助 | 7 | 3 | 10 |
| 番 頭 | 4 | 1 | 5 |
| 医 者 | 6 | 6 | 12 |
| 女 房 | 9 | 2 | 11 |

註：当日の欠席者は、A組5名、B組はいなかった。

この模擬授業に先立って、夏季休暇中の8月21日に実施された日本私立小学校連合会第62回全国教員夏季研修会に於いて、国語高学年分科会所属の50人の全国の私立小学校教員を対象に、同じ模擬授業を筆者が行った。ここでは権助24人、番頭4人、医者11人、女房11人であった。また、この模擬授業に参加した相模女子大学小学部の教員が、自身の学級（6年2組27名）で9月12日に行ったところ、権助6人、番頭2人、医者3人、女房13人であった。筆者が従来行ってきた授業での登場人物選択結果でも、ほぼ同様の比率であった。この比較では、今回の受講学生の選択傾向は、標準的である。

夢を実現させたという点からは権助であるが、損得の解釈により他の3人が選ばれる。今回はやや番頭が少ない傾向にあるが、番頭が選ばれなかった場面は今まで一度も無かった。今回のB組では一人だけが番頭を選ぶことになったが、本人が納得しての結果であった。話し合いと相互発表の結果で得をした人物が変わることが稀であり、主体的・対話的で深い学びを希求する道徳のねらいに合致する。読み物教材を利用した話し合い活動場面での実践対応力を身に付けることが出来る。

以下、話し合いの結果行われた発表要旨は、授業後に書かせている学修記録（ラーニングログ）によると、概ね以下の通りであった。また、A B組の発表に関して特記すべき差異はなかった。

〔権助を選んだグループの根拠〕

- 最初から持っていた仙人になる夢を実現させることができた。
- 不老不死になることができ、永遠の命を手に入れた。
- 仙人を目指した20年間は誰よりも充実しており、しかも望みが叶った。
- 権助以外の人物は、権助が居なかったら誰も徳をしていない。

〔番頭を選んだグループの根拠〕

- 面倒事を他人に押し付けることができ、責任を転嫁できた。
- 「万口入れ所」という看板を証明でき、権助の要望を叶えることができた。
- 町で評価が高まり、仕事依頼も増え、富も増えただろう。
- 出任せの無責任者から、幸運な男になった。

〔医者を選んだグループの根拠〕

- ・20年もの間、無給で権助を働かせることができた。
- ・権助を騙していたのは女房であり、自分には直接の責任がない。
- ・女房の家事が減って、夫婦間が円満になった。
- ・権助が仙人になれた松の木があることで、患者が多く集まったに違いない。

〔女房を選んだグループの根拠〕

- ・嘘をついたあげく権助を殺そうとしたのに、逆に感謝される立場になれた。
- ・20年もの間給金を払うことなく家事をさせることで、楽をすることができた。
- ・どこかでおびえていた医者と違い、何の精神的な苦痛もなかった。
- ・権助を仙人にさせることによって、周囲からの評価を高めることができた。

「仙人」の既読学生はいなかった。模擬授業序盤での選択場面では、A組の1名を除く全員が即座に「最も得をした登場人物」を選んだ。すぐに選べなかった1名は、権助をはじめから仙人であったとする芥川龍之介独特の計算された作風による可能性に気付いており、模擬授業の受講生である大学生で答えるのか、あくまで道徳授業を受ける中学生レベルとして答えるのかに迷っていたのであった。前述の全国教員夏季研修会での模擬授業で現職の国語科教員ですら、この可能性を指摘したのは一部であった。結果的にこの学生は権助を選んだが、グループでの話し合い学習の活性化に大いに寄与した。

B組で番頭を選んだのは1名であった。模擬授業終了後に配布する学習指導案を個別に示し、グループ学習の困難さを説明したが、この学生は全てを納得した上で意見を変えなかった。従来行ってきた授業でも番頭は少数派であったが、ゼロは一度も無かった。B組受講生の少なさ（12名）に起因すると判断する。また、いずれの組でも、模擬授業終了まで自分の主張を変える受講生は居なかった。道徳に限らず一般的な話し合い活動では、ある特定の意見に集約されていく傾向が強いが、「仙人」は当てはまらない。これも、芥川龍之介の計算された作風が背景にあると推察できる。

道徳教育論では、初回よりグループワークを多用し、話し合い活動の重要性を実体感させている。たとえ困難を伴う様なテーマであっても、活発な議論が行われる土壌は、普段の授業で行われていたものの、今回の模擬授業では想定以上の積極的な討論になった。この授業を契機に、さらなる活性化が為された。

5. 模擬授業を終えて

授業後に毎回提出を求め、コメントを記して返却する学修記録（ラーニングログ）には、その授業で気付いたこと（疑問に思ったことや確認したいことを含む）を任意で記す箇所がある。今回、ここに記された記載内容の主なものを以下に記す。

- 自分は権助が一番だと思っていたが、他の班の感想・理由を聞くと、自分にはない視点や発想からこの仙人を考えていて、しっかり納得できる理由があった。人それぞれに違った考えを出し合い、それに間違いはないということを再確認でき、単に授業をするのではなく、そこに道徳の心を考えられるというのが驚きであり、良い学びになった。
- どの意見を聞いても納得があった。文章の見方によって登場人物の良い面を見つけるのは、その出来事が起きた後の事かもしれないといった番頭の話のやり方もあると思った。そこで私は、自分たちで判断でき、他人に流されず自分の意見を持てる教材だと思った。
- 他の人の意見を聞くまで絶対に「女房」だと思っていたが、他の考えや見方を知って、「ああ～確かに」と思うところがあったので面白かった。それでもやっぱり「女房だ！」と自信を持てるから、本当にいい教材だと思った。想像をかき立てられたのが面白かった。
- 模擬授業での「仙人」をととても楽しく感じることができ、人それぞれの価値観の違いを実感した。
- グループワークを通して色々な意見を聞いて良かった。権助チームの意見には納得した。
- 一つの教材で、こんなにはっきりと意見が分かれるってすごいなと思いました。大抵の場合、人の意見を聞いていると、別の意見に変わったり、考えを変えたりするのですが、自分の視点で自分の考えでずっと見ているからか、他の意見を聞いてもやっぱり自分が一番正しいと思ってしまいます。どの意見でも肯定されるっていいなと思いました。
- 自分たちは番頭だと思っていたが、番頭が得をした部分を探すのは難しかった。答えの無いものでグループワークをするのは、すごく楽しかったし、他のグループの意見を聞いて納得するの楽しかった。
- 多方面の意見を聞いて、全て納得することが出来た。この教材は深いなと感じた。
- 仙人を生んだ医者や番頭が、この後有名になったかもしれないという意見や、権助が元から仙人だったという意見など、自分だけで読んでいたのでは思いつかなかった。他の人の主張に、とても納得することができた。
- 権助が最初から仙人であり、女房を懲らしめる目的で来たという考えも出来る。20年もの奉公をタダで行うという事に、公德心に通じるものがある。
- 権助が最初から仙人だったとする考え方を聞いた時、とても驚いたと同時に、そう考えると全てのことに説明がつく気がしてならない。でもやっぱり、一番得をしたのは医者だと信じる。
- 自分では権助について確実に読み取り、権助が一番得をしたと信じていた。けれども「元々仙人説」を聞き、公德心による損得の価値観のあり方を知ることができた。
- 権助が最初から仙人であり、女房を懲らしめる目的で来たという考え方も出来ることが分かった。20年もの奉公をタダで行うことに、公德心に通じるものがある。
- 「一人前の仙人になれました」という部分で、仙人なのかもしれないと気付いた。もしかしたら、仙人になる修行に「人間のもとで～する」というのがあるのかもしれない。

- どの意見を聞いても、納得できる程難しかった。だからこそ、国語でありながら道徳なのだと
思った。
- 自分が最初読んだ時と話し合った後では、話の内容の中で気がついたことがかなり増えるし、他
のグループの意見を聞くと発見がより増えてより内容が深く分かった。
- 他のグループの意見を聞いて、なるほどと納得することが多かった。権助がいなければ誰の徳も
発生しなかったという権助グループの意見には、はっとした。
- これが、いろいろな立場に立って物事を考えるということなのだと思う。番頭を選ぶと、デメ
リットを考えて行動することになるが、これが立場によるものなのだと分かる。
- グループ内で話し合う時に、どうして同じ意見になったのかの理由や意図をはっきり言い合えた
ので良かった。本文中の女房と医者の関係から、薪割りなどの重労働は医者がやらされていたの
を権助が20年働いて助かったことを主張しました。権助の「元々仙人説」には驚きました。想像
もつかなかったです。

模擬授業後に受講生全員に感想を口頭で求めた。主体的・対話的で深い学びが模擬授業で行われ
たとした上で、誰もが教材文の持つ可能性の大きさに言及した。その際に、自らが小中学校時代に
受けてきた道徳の思い出を語る場面がいくつもあった。道徳の授業での話し合い活動を思い出した、
担任の先生がグループ活動に熱心であった、道徳の話し合いが楽しかったという肯定的な意見も
あったが、そうでない否定的な思い出が多かったこともまた事実であった。

今回の学習指導要領の改訂で「特別の教科」として位置づけ直された道徳の授業の背景には、道
徳は各教科等に比べて軽視されがちであり、その目的を十分に果たし得ていないという現状への批
判があった。徳育についての教育は、すべての教育活動で行われることは言うまでもない。その中
で道徳の時間は「道徳の要」であり、さらなる強化策として教科化が行われた。系統的・体系的な
指導が必要であるのは他教科と同様であるものの、数値による評価はなじまないところから、「特
別の教科」になった経緯がある。文書による評価には、生徒自身による学びの振り返りが前提にな
り、自己の学びを客観化する目的での話し合い活動は必須条件なのである。

終わりに

2018年度の道徳教育論で実践した、新学習指導要領下で求められる独自道徳教材の可能性を明ら
かにし、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた課題を考察した。さらなる一般化と普遍化に向
けて、補充すべき独自教材数を増やすと共に、各方面での実証を積み重ね、求められる授業モデル
の構築に向けての取り組みを追求していきたい。

参考文献

- 中央教育審議会（2016年）「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）第197号」pp49-50.
- 文部科学省（2018年）「中学校学習指導要領（平成29年度告示）解説 特別の教科 道徳編」pp92-95.
- 江島顕一（2016年）「日本道徳教育の歴史 近代から現代まで」ミネルヴァ書房：pp340-343.
- 貝塚茂樹、関根明伸編著（2016年）「道徳教育を学ぶための重要項目100」教育出版：pp70-71.
- 永田繁雄監修『道徳教育』編集部編「学習指導要領改訂のポイント 小学校中学校 特別の教科道徳」明治図書：pp16-17.